

ナレーション組曲＜愛と勇気と平和の人／東北の英雄

「アテルイ」の物語＞ 可知日出男(かちひでお。)

(K.) ねぶた祭りの張り子の武者絵でおなじみの「アテルイ」ですが、今日は私の考えた想像上の勇者「阿豆流為」として物語を作りました。なぜ今、悲劇の英雄「東北のアテルイ」をやるのか？ 東北を中心にした「東日本大震災」から8年、石巻市・釜石市・いわき市・南三陸市などいボランティア委伺った時のことを忘れないように、そこに暮らす人々の心や忍耐強い在り方に思いを寄せています。(中略・・・)

※初演は、私が語りながら演奏しましたが、朗読家・俳優・女優など、数名に分けて語っていただきたいと思います。また、ドラマティックな場面は、自由に膨らまして、アテルイや、田村麻呂・モレや村人・代官などの役を作って、演劇的に膨らませていただいて構いません。音楽はすべて可知のオリジナル作品「東北組曲」から、構成いたしました。

(静かな風景を思わせる音楽の中、ナレーター登場～)

(前振り) はるか千年の昔、奈良の平城京が終焉(おわり)を迎えようとしていた頃、東北の山深い村に、後の英雄となるオノコが生まれました。～

その頃、東北の民は、律令制を全国に進める大和の朝廷から、イテキ～蝦夷(えみし)として怖れられていました。立派な都を作った大和からみれば、素朴な自然の村に住み、肌は毛深く骨格や肉付きも異なり、同じ日本人とは思えないほど、びっくりしたのかもしれない。大宮人(おおみやびと)の中には、平定(へいてい)すべき野蛮な民ととらえる人たちがいたのです。

ナレーション組曲 ＜愛と勇気と平和の人～東北の英雄「アテルイ」の物語＞!!

N. 東北の英雄と云われ「火炎の人」と言われた勇者「アテルイ(阿豆流為)」は、心やさしい”愛と平和の人”でもあった。野山をゆくときにも、道端の花を踏まないように歩き、鳥の声・風のを”自然の音楽”のように聞き分け、生まれ育った大地を愛し、人々を愛し、部族が平和に暮らせるよう、その祈りを天に捧げていた。

M I. 「阿豆流為のテーマ」蝦夷(エミシ)の笛：野山・自然を歩くように～

N. 東北は深い。さまざまな人を養い、育てる力を持つ。

多くの部族・民族が暮らし、豊かな稔りと、光あふれる平和を謳歌する。自然はゆるやかで広く、穏やかだが、時に激しく”大魔神”のように荒れ狂う時もある。

大地を潤す幾本もの大河は、その象徴として、偉大にしてゆうゆうと流れ、時に人間の傲慢を戒めるかように大氾濫を起こす。四季を通じて様々に色を変えるその流れに、我ら東北人は、”縄文の昔”のような、太古の郷愁を感じる。

M2. 「米代川望郷の歌（「東北のアテルイ～未来への祈り」の原曲）」

N. アテルイには大事な母「モレ（母礼）」がいた。部族の守り神のように賢く、戦術にも長け、争いが起きた時には、身を張って調停し、村人や息子たちの命を助けた。母には、大自然の生き物から学んだ、賢い知恵があった。

アテルイも、尊敬する母の元で成長するにつれ、若者や女人を愛するようになり、ロマンを育んだ。

その愛やロマンは、山や川、村や部族を越えて大きく広がり、一つの”東北大陸”として、多様な人々を平和に修める夢となった。

M3. 「アテルイの愛とロマン」～

N. アテルイは強かった。先輩の勇者たちと協力し、若者を育て、団結の固い軍（群れ組織）を起こし、実に百戦百勝 !!～偉大な大丈夫（おおますらお）に育っていった。

N. ちょうどその頃、京の都を開いた桓武天皇から、（敗北の続く奥州征伐軍の）新しい征夷大將軍に坂上田村麻呂が任命され、満を持した派遣が行われた。彼は、阿豆流為軍のど元である、仙台と石巻の間の要衝に、「多賀城」という大規模な要塞（とりで）を築いた。

我ら東北の民を愚弄するやり方に怒ったアテルイは、これを民の力で取り囲み、あろうことか城に火を放った。「火炎の人・アテルイ」の名前のいわれとなる戦いが始まったのだ !!!～

M4. 「炎の時・魂の Black-Rain」～

N. 半島系の血を引いている母のことや、皇室内の深刻なテロや争いに悩んだ桓武天皇は、聖徳太子の説いた「平安の世」を作る理想を求めていた。各地の豪族に官位を与え、統治し、”和合の日本列島”を作る「律令制」の夢にまい進していた。しかし中には、官位に付いた東北人を、{エミシ} 出身であるとして蔑む人がいた。この差別に対する怒りから、民の反乱が起きることもあった。

桓武天皇は、大陸や半島から渡った高い文化・調和の思想に傾倒していた。もう、朝廷内で人が殺されるような争いは真っ平だった。特定の人や部族が”上の神”になる考えではなく、多様性を束ね、「和をもって貴し」と成したかった。

※ BGM～「東北讃歌」の”序”・・・

N. 勇猛果敢を誇ったアテルイ、貴族出身ながら運命に逆らえず兵を率いた坂上田村麻呂、一進一退の攻防、お互いがお互いを立派な武人・人格として認めているにも拘らず、戦さ（いくさ）は続いた。。。。

・・東北大陸をまとめてきた、さすがのアテルイも、鉄器などの新しい兵器を使う、大和の軍に押し返され、捕らわれの身となった。。長い長い道のりを経て、都に着いた。母とと

もに京の街を引きまわされ、その文化の美しさや、豊かな国の人々の笑顔を見せつけられた。

N. 自分たち東北人（エミシ）から、この戦（いくさ）を終わらせ、大和を進める「律令制」に組み入れられることは、あの素晴らしい「東北の自然率（おきて）」を手放すことになるのではないのか！？

・ ・ 民族の思想を手放すという最大の窮地にあって、なぜかアテルイには、一つの不思議な確信が湧いていた。～偉大な祖先や大自然の教えは永遠になくならない。我々東北人は、懐が深いのだ。先進的な改革に生きる大和の人たちとも、必ず平和にやっていける！！私がこうべを垂れ、いったん負けることによって、わが愛する「東北の魂」が、「ヤマトの思想」と融合し、「一つの日本」が生まれる。この新しい思想が、全国に浸透していくことになる。

自然とともに生きていく人間の在り方や、自然を活用する我らの高い技術が、大和の志（こころざし）ある人に伝わり、日本の中の「東北の心」になるのだ！！ 一見人工的に見える京の文化も、異国から来た力の文化（覇権主義）だけではなく、その中に、優雅で素晴らしい「和の心」を持っている・ ・！！

大和と東北が力を合わせれば、やがて一つの、「平安な日本」ができるのだ！！・ ・

M5. 「振袖は泣く（陰旋法の雅な曲）」～ （いわみのや～たかつぬやま～やまの～）

・ ・ 「アテルイ」の歴史に学び、大きな観点から、壊れようとしている現代の「共生のエートス」に思いをいたしながら、語る・ ・

N. 民族にはそれぞれ固有の哀しみがある。それぞれ固有の知恵がある。それぞれ固有の【愛】がある。しかし皆、「母」から生まれた子どもであることに変わりはない。アテルイは、わが母の礎（はりつけ）になっても笑顔を失わない姿を眼（まなこ）に焼き付け、自然や、あらゆる部族・人々を大切にする【愛】を忘れなかった。大きな夢とロマンは必ず伝播する（世界に伝わっていく）。

N. （現代の社会で）争っている国々も民族も、いつか必ず融和し、海を隔てた人々とも、手を結ぶことができる。大きな嵐の次には、平穏な「なぎ」が必ず来る。人々が夢に見た「希望の海」は、どこまでもさらに深く続いている・ ・

M6. 「一衣帯水・朝なぎ夕なぎ（平和を希求する曲）」～ （高い山の端に立って初めて海を見た時のように・ ・）

（End-Roll） きみはうみをみている きみのちいさな めのなかで うみは かぎりなくあおい～

M7. アンコール：『東北讃歌”Jan’Gala”』～

#英雄 #ナレーション組曲 #愛と勇気 #アテルイ #東北讃歌 #ジャンガラ